

2025（令和7）年度沖縄県若年性認知症支援推進事業
若年性認知症本人交流会・本人ミーティング「同士の会」 報告書

日時 2025年12月24日(水)12時～16時

場所 南部の商業施設内

参加者 :合計5名 本人2人+ゲスト1名(65歳以上)、支援者2人

目的：若年性認知症の本人同士が自らの体験や希望、必要としている事を語り合い、自分達のこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場づくりを目指す。

1. 当日の様子

今回の同士の会も、穏やかな雰囲気の中かで始まり、参加者それぞれが子どもや家族のこと、日々の暮らし、お金のこと、仕事や将来のこと、親の介護や看取りまで、幅広いテーマについて率直に語り合う時間となった。笑いを交えながらも、生活の中にある悩みや戸惑い、家族への思いが自然に語られ、当事者同士だからこそ共感し合える場面が多く見られた。

会のはじめには、子どもの話題から会話が広がった。支援者の私事であるが、東京にいる娘が帰省すること、その際に彼氏らしき相手連れてくるかもしれないことを話しながら、「明日帰ってくるんだけど……もう会いたくなくなった」と冗談まじりに話すと、同じ父親として娘を持つ当事者からも、笑顔の中で共感やアドバイスを頂くことになった。

子どもとの関わりでは、お金のやりとりも大きな話題となった。MHさんは、「娘に弱いわけ。めちゃくちゃ娘に弱いわけ」と笑いながら話し、頼まれるとつい断れず、結果として返ってこないお金もあることを明るく語った。またYMさんは、「PayPayで子供から突然お金の請求が着た」と驚き、スマホ決済を通じて子どもからお小遣いの送金依頼が来ることへの戸惑いを笑い話として共有した。子どもを自立させたい気持ちと、つい手を差し伸べてしまう親心との間で揺れる気持ちを分かち合った。

また、子どもの進学や進路についての話題もあった。大学進学や受験を控える子どもの様子、携帯電話の機種変更をクリスマスプレゼントにしたこと、親が費用をどこまで負担するかなど、それぞれの家庭での工夫や考え方が語られた。「これがお父さんからのクリスマスプレゼントです。と欲しがっていたスマートフォンを渡したらすごく喜んでた」という話には、参加者全員が父親の思いを感じて温かい雰囲気に包まれた。

また、子どもが20歳になるまでは面倒を見る、その後は自分で負担するよう少しずつ切り替えていく、という考えも共有され、親としての責任の持ち方や、自立を促す関わり方について、実感のこもった語りが続いた。

会の中盤では、お金の使い方やローン、生活の立て直しに関する話題が深まった。知人がローンを組んでしまったケースを心配する声があった。この流れの中かで、ローンや利子の仕組みについて詳しく説明する場面もあった。参加者の一人は、自身の経験を交えながら、「100万借りて年利10%なら、1年で10万円の利子がつく」「返しているつもりでも、利子で元金があまり減らないことがある」とわかりやすく話し、昔の高金利時代の話や、消費者金融の過払い金返還の話にも触れた。生活の中かで直面しやすいお金の問題を、実感のこもった言葉で学び合う場面となっていた。

仕事や社会参加に関する話題も出された。障害者雇用枠の仕事の少なさや、本人に合う仕事・合わない仕事があること、責任の重い仕事や運転業務などは難しい場合があることなど、現実的な就労の壁について語られた。

また、年明け1月10日(土)の若年性認知症一般講演会に登壇する大城さんの話す内容について話題になり、「今の生きがいや楽しみ、仲間づくりが大切ということを伝える予定」と、仲間に講演会で周りに伝えたい前向きな想いを共有されていた。

来年1月17日(土)に”認知症の人と家族の会沖縄県支部”の出張「ひまわりカフェ」が名護市で開催する企画がある。その日は”新オレンジサポート室”の若年性認知症カフェの開催日ではあるが、家族の介と合同で名護市にて一緒に美味しい昼食を食べ、午後は家族会の顧問である城間先生の話聞きに行きませんか?というお誘いが着ていることを報告。若年性認知症の方々も参加しやすいよう、送迎車を出して乗り合いで行く提案を伝達。仕事等の介ジュエール確認を各自してから返事を頂くこととなった。

親の介護や看取りについての話題が自然に広がった。「普段から、いろんな思いをお互いに話してた方がいいね。自分はこんなふうにしたいよ、とかね」と話し、元気なうちから本人の意思を家族で共有しておくことの大切さが語られた。他にも「病気である前から、どんな風に自分は生きていか?を知っていれば、いざという時も慌てないで済むかも」と話し、蘇生や延命について兄弟で話し合った経験を共有していた。

ある参加者は、祖母が亡くなる前の一週間ほどの間に、急に昔話をしたり、「長くないから」と思わせるような言葉を口にしたことを振り返り、「最後の挨拶みたいな感じだった」「なんとなくわかってたのかなと思った」と語った。他にも、家族が亡くなる前に部屋をきれいに整えたり、見たことのない写真を飾っていたりした経験が語られ、人生の終わりを前にした人の感覚や準備について、皆が静かに耳を傾けていた。「意識がなくても最後の瞬間まで耳は聞こえてるっていうから、ちゃんと声かけはした方がいい」という話題もあり、看取りにまつわる体験談も印象的であった。

会の終盤には再び、家族や子どもの話題に戻り、子どもたちの進学・部活動やその応援に行った時のことなどの話題もあった。親としての悩みや戸惑いはありつつも、「元気だったらいいですよ」「自分をちゃんと持っている子だから」といった言葉に、子どもを信じて見守る気持ちも表れていた。クリスマスイブという時期もあり、日常の小さな出来事や家族とのやりとりを語り合いながら、穏やかな時間の中で会は進んでいった。

2. まとめ

今回の同士会では、子どものこと、家族とお金のやりとり、生活の立て直し、趣味やこだわり、仕事や講演活動、そして親の介護や看取りに至るまで、参加者それぞれの生活に根ざした話題が自然に交わされた。全体を通して感じられたのは、当事者同士だからこそ話せる率直さと、相手の話を受け止め合う安心感であった。笑いながら語られる場面も多かったが、その背景には、家族への愛情、生活への不安、自分らしく生きたいという思いが確かに流れていた。互いの経験を伝え合うことで、「自分だけではない」と感じられる参加者にとって有意義で貴重な時間となった。

以上